

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 秋廣 尚恵 印

学位申請者

Barcat Corentin Jean

(バルカ コランタン ジャン)

論文名

La variation sociolinguistique chez les francophones natifs et les apprenants japonophones du français : La réalisation de la particule négative ne/n'

(「フランス語母語話者と日本人フランス語学習者における社会言語学的変異: 否定辞の ne/n' の省略」)

【審査結果】

秋廣尚恵を主査とし、主任指導教員の川口裕司(東京外国語大学名誉教授、外部委員)、および副査として根岸雅史、川上茂信、Sylvain Detey(早稲田大学教授、外部委員)から成る審査委員会は、2024年2月21日に上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士(学術)の学位を授与するのがふさわしいとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文は、フランス語の母語話者と日本人フランス語学習者の話し言葉における否定辞 ne/n'の実現(省略あるいは維持)を扱った研究である。5つのフランス語母語話者の話し言葉コーパスと1つの日本人フランス語学習者の話し言葉コーパスを用い、そこから抽出された27249件の例を分析することで、ne/n'の実現の条件を言語学的要因と言語外的要因に分けて詳細に記述し、考察を加えている。

本論文は663頁にわたる大きな論文で、以下の4つの部から構成される。第一部では、先行研究を批判的に読み解きつつ、本論文のテーマに関わる社会言語学の重要な概念(社会言語学の出現、母語話者と学習者の言語変異、レジスター、社会言語学的能力)を論じたのち、母語話者と学習者の否定辞の実現に関する先行研究を網羅的に検討する。第2部では、使用するコーパスの特徴やメタデータの説明と分析方法について述べ、導き出されうる仮説を提示する。第3部では、フランス語母語話者のne/n'の実現のされ方について、2つの大規模なインタビューのコーパスの分析に基づき、言語学的要因と言語外的要因を明らかにする。ついで、インフォーマルな会話、政治家のインタビュー(フォーマル

な会話)、政治家の演説(書かれた準備原稿に基づく演説)という異なるレジスターに属する3つのミニコーパスのデータを調査し、ne/n'の実現がレジスターの違いに応じて、どのような変異を見せるかを記述する。第4部では、日本人フランス語学習者のne/n'の実現について、学習者コーパスを用いて、言語学的要因、言語外的要因を明らかにし、母語話者のそれと対照させて論じる。

[問題の所在]

フランス語学の分野では、否定辞についてはすでに多くの研究がなされているが、先行研究では否定辞の実現形として、/nə/とシュワーなしの/n/を区別した研究はほとんどない。本論文では、これらをきちんと区別し、さらに、それらが現れる音韻論的文脈に注目して、子音の前の位置と母音の前の位置に現れる場合に分けて分析を行う。本論文の目的は、大規模な話し言葉のデータを用いた調査に基づき、否定辞はどのように実現されるのか、また、その実現のされ方に影響を与える言語学的要因(音韻論的文脈と統語論的文脈)と言語外的要因(社会言語学的変異)は何かを明らかにすることである。また、これまでの先行研究では、日本語学習者を対象とした否定辞の実現の実証的研究は全く行われていなかったため、これを調査し、対照中間言語的観点から母語話者と学習者の否定辞の実現を比べ、その類似点と相違点を明らかにする。

[分析の枠組み]

まず、使用したデータであるが、(1)母語話者のコーパスとしては、次の5つを使用している。

1. ESLO2 インタビュー
2. PFC コーパス(インタビュー、自由会話)
3. ESLO2 インフォーマルな会話
4. 政治家インタビュー
5. 政治家演説

ESLOとは「Enquête Sociolinguistique à Orléans(オルレアンにおける社会言語学的調査)」というコーパスで、オルレアン大学のロワール言語学研究所がインターネット上で音声、転写、メタデータを無料公開している大規模な話し言葉コーパスである(<http://eslo.huma-num.fr/>)。1969年から1974年までに収集されたデータをESLO1、2008年以降に収集されたデータをESLO2と呼ぶが、このうち、バルカ氏が使用したのは、ESLO2の一部である。ESLO2には様々なジャンルの話し言葉データが含まれるが、そのうちの「インタビュー」と「インフォーマルな会話」を使用している。

PFCとは「Phonologie du Français Contemporain(現代フランス語音韻論)」というコーパスで、フランス語圏の各地で収集されたフランス語の変異体のコーパスの音声、転写、メタ

データを無料公開している (<https://www.projet-pfc.net/>)。バルカ氏はこのコーパスのうち、インタビューと自由会話を使用している。

政治家インタビューはテレビで放映された3名の男性政治家と3名の女性政治家のインタビューをバルカ氏自身が書き起こしアノテーションを施して作成したコーパスである。

政治家演説は、以上のインタビューをされた政治家6名の行った所信表明演説である。この演説はもともと書かれた予稿に基づいて演説されるものであり、「口頭発表された書き言葉」としての特質を持つものである。これについてもバルカ氏自身が聞き取り、転写を行ってコーパスを作成している。

これらの5つのデータを比較することによって、文体的変異を観察することが可能となった。

次に日本人学習者の話し言葉のコーパスとしては、IPFC-Japonaisのみを使用している。

このコーパスは「IPFC (Interphonologie du français contemporain: 現代フランス語中間音韻論)」という先に述べたPFCに関連するコーパスであるが、とりわけ世界のフランス語学習者の変異を収録したものである。IPFC-Japonaisは日本人学習者のデータを集めたものである。(なお、バルカ氏はこの調査の調査者としてプロジェクトに関わっている。)日本人フランス語学習者コーパスとしては最大規模のコーパスである。

バルカ氏は以上の6つのコーパスに出現する否定文を全て抽出し、以下の表のようにne/n'の実現の5つのタイプ(子音の前に現れる3つのタイプと母音の前に現れる2つのタイプ)を分類し、それぞれのタイプの現れる言語的、言語外的要因を記述した。フランス語では、母音衝突を避けるために、ne+母音の連鎖において、エリジョンという縮約の現象がおきるため、母音の前の位置では、/nə/は表れない。バルカ氏の分析の独創性は、とりわけ、子音の前の位置に現れる否定辞においても、話し言葉では、シュワーの/a/が脱落することを考慮した分類を行ったことである。なお、/nə/と/n/という極めて微細な差異について、膨大な聞き取り作業をバルカ氏自身が行い分類をしている点は称賛に値する。

否定辞の実現のタイプ				
音声	子音の前		母音の前	
	タイプ	特徴	タイプ	特徴
/nə/	ne の維持 Ex : <i>Je ne suis pas</i>	規範的	-	-
/n/	シュワーなし ne の維持 Ex : <i>Je n' suis pas</i>	非規範的	n' の維持 Ex : <i>Je n'ai pas</i>	規範的
/∅/	ne の省略 Ex : <i>Je suis pas</i>	非規範的	n' の省略 Ex : <i>J'ai pas</i>	非規範的

また分析にあたっては、言語的な要因として、音韻論的要因(左文脈、及び右文脈、リエゾン、母音衝突など)だけではなく、統語的要因(凝結表現により否定辞 ne/n'が省略不可となる場合、主語の

タイプごとの分類、動詞の形態統語論的特徴、チャンク、*pas, rien, personne, jamais*といった動詞の後に置かれる否定副詞との関係、不定詞句など)や談話的要因(流暢性、繰り返しやいい直しなどの現象)を調べ、さらに社会言語学的な要因として、話者の特徴(年齢、学歴、性別、フランス語学習者の場合には学習歴や留学経験の有無など)やレジスターの違い(フォーマルかインフォーマルか、インタビュー、自由会話、予稿有り演説などのジャンルの違い)が否定辞の実現にどのようなインパクトを与えるかを詳細に研究している。また、それぞれの要因の有意差の有無については、カイ二乗検定を用いて検証している。

[各章の概要]

本論文は4部から構成されている。第1部では問題の所在を明らかにしたあと、社会言語学に関わる重要な概念に関する先行研究、及び、母語話者と学習者の否定辞の実現に関する先行研究を概説し、批判的に検討している。第2章では、使用する6つのコーパスの特徴が詳細に記述され、データの選択の理由、否定辞の実現の分類、分析の基準やデータの扱い方を明らかにし、分析に先立ち検証をするべき仮説を立てる。第3章では、母語話者のコーパスのデータ分析結果が示される。バルカ氏は、まずESLO2インタビューとPFCという2つの大規模なデータを分析し、否定辞の実現の全体的な傾向としては、

- ・ これら2つのコーパスでは、否定辞の省略は85%から90%に及ぶ。
- ・ 若干ESLO2インタビューの方が省略率は高かったものの、両者の差はそれほどない。
- ・ 代名詞主語の場合、否定辞の省略率が高く(90%)名詞主語の場合には低くなる。
- ・ *ne/n'*の左側のコンテキストの中での母音の減少が多くみられ、規範的発音は稀である。
- ・ チャンク(*c'est, c'était, j'étais, je savais, je sais, je suis, il y a, il y avait, il y en a, il faut*)では否定辞の省略は多いが、スーパーチャンク(チャンクの中でもとりわけ頻度の高い*c'est, c'était, il y a, il y avait*)では、否定辞の省略がほぼ100%に近い。
- ・ *Personne*などの否定副詞が主語として左文脈に出る場合には、否定辞の省略率が低い。
- ・ 話者の年齢的には若い話者の省略率が高いが、年配の話者でも省略することは多くあり、実際、省略率が50%以下の話者を探すことは難しい。
- ・ 学歴や職業などについて見ると多少の違いはあっても、はっきりした違いは見られない。

第3章の後半では、ESLO2インフォーマル会話、政治家インタビュー、政治家演説という3つの文体的に異なるコーパスを使用し、文体差が否定辞の省略に与える影響が検証された。その結果、フォーマルか、インフォーマルかという文体差は非常に大きな要因であり、シュワーのない*ne(/n/)*を実現することは、フォーマルな話し言葉の一つの特徴と考えられることが分か

った。

- ・ ESLO2 インフォーマル会話のように、友人や家族との会話では、否定辞の維持はほとんど見られない。
- ・ 政治家インタビューでは、否定辞の省略は 30~40%で、シュワーのない *ne* の実現も多い。
- ・ 政治家演説では、否定辞はほぼいつも維持されている。

第 4 章では、IPFC-Japonais のデータを分析することによって、日本人フランス語学習者の否定辞の言語的要因、言語外的要因を記述し、母語話者の結果と比較している。以下の点が明らかになった。

【言語的要因】

- ・ 日本人フランス語学習者の否定辞の省略率は 55%で、母語話者のそれに比べてかなり低い。
- ・ シュワーのない *n' /n/*を母語話者よりも頻繁に使用している。
- ・ 否定辞の省略に関する言語的要因のほとんどが日本人フランス語学習者においても観察された(主語のタイプや動詞の時制や叙法など)が、違う点もある。例えばチャンクに関して言うと学習者も母語話者も、*c'est, c'était* では省略率が高いが、学習者の場合、*il y a* や *il y avait* では母語話者よりも省略率が低い。
- ・ 学習者の場合、目的語代名詞が入ると、省略率が低くなる。
- ・ 学習者では、否定副詞の *pas* 以外の否定副詞が用いられる場合には、省略率が低くなる。

【言語外的要因】

- ・ 学習者の学習経験が否定辞の省略に与える影響は大きい。学習経験が少ない(3 年未満)場合や、フランス語のレベルが低い(B2 未満)場合には、省略率は低くなる。
- ・ B2 レベル以上では、省略率は高くなるものの、上がり続けるわけではなく、学習経験やレベルが上がっても省略率は変わらない。
- ・ 留学前と留学後では、省略率の伸びは 2 倍ほどになり、留学が大きな影響を与えることが分かった。留学する期間について見ると 6 か月から 1 年間留学した学習者の省略率の伸びが著しく、60~70%に至る。ただし、1 年以上留学した学習者の省略率はほぼ変わらない。留学後に 2 回録音をした学習者について見ると、時間を経るに従い、省略率は変わらないか、逆に低くなる傾向がある。

結論の部分で、第 2 章で立てた仮説に対する結論が述べられている。以下が検証された仮説とそれに対する結論である。

1. */n/*の維持は、*/ne/*の維持と同様によく見られるという仮説は正しいことが検証された。
2. */n/*の維持は、フォーマルなレジスターの特徴と考えることができるという仮説は正しいことが検証された。
3. 否定辞の省略によく影響を与えるのは、言語的要因やレジスターであって、話者の個々の社会

学的特徴はそれほど大きな影響を与えないという仮説は正しいことが検証された。

4. 言語的要因の中でも特に重要なのは左文脈とチャンクであるという仮説についてはおおよそ正しいことが分かったが、チャンクにより省略率には違いがあり、とりわけ *c'est, c'était, il y a, il y avait* では特に省略率が高い。それ以外のチャンクでは、母音の前の /n/ の省略率は子音の前の /n/ の省略率よりやや低い。また、母音間の位置では、否定辞の省略率はぐっと低くなる。この結果はこれまでの先行研究では指摘されていない。
5. インフォーマルな会話の状況では、否定辞の省略は極めて高いという仮説は正しいことが検証された。
6. どちらかと言えばフォーマルなインタビューなどの状況でも、否定辞の省略は多いが、同時に /nə/ の維持も /n/ の維持も見られるという仮説は正しいことが検証された。ESLO2 インタビューや PFC では、/nə/ よりも /n/ の維持が 1 対 3 程度の割合で多かった。
7. フォーマルな状況では、否定辞の省略も、/nə/ の維持も /n/ の維持もよく見られるだろうという仮説は正しいことが検証された。政治家のインタビューでは、3 分の一の否定辞が省略され、3 分の一が /nə/ として実現され、3 分の一が /n/ として実現された。n' だけについて見ると、その 30% が省略され、70% が維持された。ただこれには個人差もあると思われるので、より大きなデータでの検証が必要であると考えられる。
8. 演説のような予稿に基づく話し言葉の場合、シュワーなしの /n/ が現れるとしても否定辞の省略はほとんど存在しないだろうという仮説は正しいことが政治家の演説コーパスの分析から検証された。
9. フォーマルな状況においては、話者間の個人差が大きいだろうという仮説は正しいことが政治家のインタビューコーパスの分析から検証された。
10. フランス語母語話者よりも日本人フランス語学習者の方が否定辞の省略率が低いであろうという仮説は正しいことが検証された。
11. 学校で教育を受けている学習者にとっては、留学は否定辞の省略を高めるきっかけになるだろうという仮説は正しいことが検証された。
12. 学習者にとって、学習時間の長さは否定辞の省略にあまり影響を与えないだろうという仮説については、部分的にしか検証されなかった。学習時間の長さはある一定のレベルになるまでは確かに省略率の上昇を促し、実際 1000 時間から 1500 時間学んだ学生は 60~70% まで省略するようになる。しかしながらそれ以上長く学習しても、省略率は伸びないことが分かった。
13. 日本人フランス語学習者は上級者であっても /n/ をあまり使用しないという仮説については否定された。日本人フランス語学習者は比較的早い段階から /n/ を使用し始める。

バルカ氏は、否定辞の省略という問題について、学習者が教科書で教わる規範的なフランス語と実際に話されているフランス語の違いが大きいことをコーパスのデータを用いて明らかにした。そして、母語話者の話すフランス語においても、否定辞の省略は、社会言語学的な変異が大きい現象であることを指摘した。また、学習者の話すフランス語についてもコーパスを用いて記述し、否定辞の省略とい

う社会言語学的な能力の育成において母語話者のフランス語に触れることが非常に重要であることを示した。

【質疑応答】

以上がバルカ氏の博士論文のまとめである。質疑応答では、留学経験だけではなく、ネットなどを介したオーセンティックなフランス語との接触は否定辞の省略を学ぶために有用であるか、学習者に話し言葉を先に教える(否定辞のない形から教える)方がよいか、あるいは書き言葉から先に教える(否定辞のある形から教える)方がよいか、といった教育に関する質問があった。また、文体的変異にはもっと細かな分類(政治家の文体には政治的立場の違いが絡んでいないかなど)も必要ではないかというコメントや、流暢性の定義についての言語学的な観点からの質問があった。さらに、統計的分析にあたっては、各要因の有意差の有無をカイ二乗検定で出しているが、これらは効果量も算出するとよかったのではないかと、また、今後は先行研究で用いられている多因子分析なども適用してみるとよいのではないかと、とのコメントがあった。また、形式的な誤りについていくつかの指摘があった。バルカ氏はそれぞれの質問や指摘に対し、真摯に回答し、誤謬については訂正し、分かる点については明解に説明を行い、不明点についてはその旨認めて今後の課題として取り組むと述べた。